小児腎疾患の臨床的研究

国立病院医療センター
小児科　山口正司
協力者，同上　葛　秀樹　新居美都子
魚住　建　松下竹次
研究部，病理室　岡田正明

I. IgA 沈着を伴った腎炎，厚生省共同研究班々会議（51. 11. 17.）

昭和50年10月以後，当院小児科で行った腎生検標本についてはすべて免疫螢光抗体法を行った。このうち急性腎炎，紫斑病性腎炎，Lups 腎炎，ネフローゼ症候群，家族性腎炎，膜性腎症など，臨床的，組織学的に診断のついたものを除いた18例の尿異常所見者について IgA 沈着の有無で2群に分けて比較検討した。

IgA 陽性者（A 群）は11例，IgA 陰性者（B 群）は7例であった。

性別，A 群では11例中8例は男性で，逆に B 群では7例中1例のみが男性で，A 群に男性が多かった。

血尿の程度と IgA 沈着の有無は関係なかった。

血尿に蛋白尿を伴ったものは A 群では11例中3例に認め，1例は1日蛋白 4.3g であった。B 群は何れも蛋白（－）であった。

血清 IgA 値は A 群が B 群に比べてやゝ高い傾向がみられた。

IgG, IgM 値は両群に差が認められなかった。

β_1c 値は B 群においてやゝ高めであった。

クレアチニン・クリアランスは両群に差を認めず，組織学的所見の比較では A 群の方が B 群に比べて変化のやゝ強いものが多かった。

II.

11才のネフローゼ症候群の女児の興味ある組織所見 (mesangio-proliferative and depositive GN) について報告した。

III. 小児と成人における IgA 腎症の比較（51. 11. 17）

昭和50年2月～51年10月に腎生検を行い螢光抗体法を行った成人，小児192例について検討した。

前回同様，臨床的，組織学的に診断のついたものを除いた不明の血尿および蛋白尿例は59例（6才～63才）であった。このうち小児（16才未満）は31例，成人は28例であった。59例中 IgA 沈着を認めたものは44例で，小児21例（67.7%）成人23例（82.1%）であった

IgA 沈着の強さは，小児は成人に比べて弱いものが多く，また IgA 単独のものが多かった（表）C_1q は成人の1例にのみ（＋）だった。IgA（－）群では，Fibrin 陽性の1例を除き，IgA 以外の螢光抗体も全て陰性であった。

表 1

血尿，蛋白尿 ＼ 螢光抗体法	小児 31 例	成人 28 例
IgA（＋）	21	23
IgA	15 (71.4%)	6 (26.1%)
IgA, IgG	0	0
IgA, IgG, β_1c	3 (14.3%)	6 (26.1%)
IgA, β_1c	3 (14.3%)	11 (47.8%)
IgA, IgM	3 (14.3%)	8 (34.8%)
IgA, Fibrin	8 (38.1%)	15 (65.2%)

尿所見と IgA 沈着の関係は，IgA 陽性者は小児では血尿だけのものに多く，成人では蛋白尿を伴うものに多かった。IgA 陰性者は1例を除き他は全て血尿たけであった。

IgA（＋）の組織所見は，小児では minimal change

6例, local G. N. 3例, generalized G. N. 12例であったが, 成人においては minimal change は1例のみで他は全て generalized G. N であった。

血清 IgA 値は IgA (+) 者に高いものがあり, IgA (−) 者に比べて高い傾向かあったが, 小児と成人では差は認められなかった。

血清 IgG, IgM, β_1c 値は IgA (+) と IgA (−) 群で差はなく小児と成人間にも差はなかった。

以上 IgA (+) を小児と成人について比べると成人では血尿の他に蛋白尿を伴うものが多く, 光顕による組織変化も小児より成人が強い傾向がみられた。IgA 沈着率も成人の方がやゝ高く, かつ成人は IgA 単独より IgA, β_1c を伴うものが多かった。このことから免疫反応は年令と共に進み, 組織変化も進行している印象を得た。

IV. 無症候性血尿, 蛋白尿の長期予後 (52. 2. 15)

我々は, 偶然発見された血尿および蛋白尿の中で, 臨床的, または組織学的に診断のついたものを除外した原因不明の血尿または, 蛋白尿の経過を観察してきた。今回これらのものから5年以上の長期に渉っての経過をみられた48例について, その予後, 並びに予後に関する2〜3の因子について検討した。

症例は, 血尿群33例, 蛋白尿群6例, 血尿+蛋白尿群9例で, 観察期間は5年〜14年, 平均7年2ヵ月であった。

尿所見の推移は, 3例の著明な改善を含めて, 尿所見の消失を認めたもの27例 (56.3%) この中血尿群では20例 (60.6%) 蛋白尿群2例 (33.3%) 血尿+蛋白尿群5例 (55.6%) であり, 血尿群と蛋白尿群に差を認めなかった。

腎生検を行ったものは, 32例 (66.6%) であり, その組織所見は, Essentially nomal (EN) 8例, Minimal change (M. C) 12例, Focal proliferative G. N. (F. D.) 6例, Generalized proliferative. G. N. (G. P.) 6例であった。組織所見と予後の関係をみると, E. N, M. C, F. P. の各群とも治癒率は50%であったが, G. P. は16.7%で前三者より悪かった。

扁桃肥大及び扁摘の有無と予後との関係をみると, 扁桃肥大のあったものは48例中22例 (45.9%) でそのうち扁摘を行ったものは16例である。扁摘後治癒したものは16例中8例 (50.0%), 扁摘をしなかったものの治癒率は6例中3例 (50.0%), 扁桃肥大のなかったものの治癒率は26例中13例 (50.0%) であり, 何れの間にも差がなかった。

治療による明らかな効果を認められたものは副腎皮質ホルモン, 免疫抑制剤を用いた2例のみであった。

経過観察中明らかな尿所見の悪化をみたものは2例で何れも血尿群で minimal change の組織所見をもったものであったことは注目に値する。

小児腎疾患の臨床的研究

国立療養所西札幌病院　門　脇　純　一

I. 目　　的

小児期のネフローゼ症候群 (「ネ」症) に Cyclophosphamide (CPA) を使用して8年を経過した。本剤は副腎皮質ステロイド剤 (ス剤) 感受性の Frequent Relapser (F. R.) の寛解延長効果を持っていると一般に認められている。一方, 本剤の副作用については未知の領域があり, 本症が悪性腫瘍などと予後が異なる点から使用にあたっては慎重なことが要望されている。この時にあたり薬効につき報告することは本剤の小児期「ネ」症治療における役割, 評価をするうえでの一資料となると考えた。

II. 対 象。 方 法。

1968年以降, 国立西札幌病院に入院した腎疾患は322例でうちネ症は59%の189例であった。治療と教育が同時にできるだけに病歴の長い, 治療に困難を覚える症例の集積がありCPAによる免疫抑制療法にふみきる症例が多く, 現在まで70例近くになっている。上記期間中に入院した「ネ」症の一部で, しかも近接効果判定以外の

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

Ⅰ.IgA 沈着を伴った腎炎,厚生省共同研究班々会議(51.11.17.)

昭和 50 年 10 月以後,当院小児科で行った腎生検標本についてはすべて免疫螢光抗体法を行った。このうち急性腎炎,紫斑病性腎炎,Lups 腎炎,ネフローゼ症候群,家族性腎炎,膜性腎症など,臨床的,組織学的に診断のついたものを除いた 18 例の尿異常所見者について IgA 沈着の有無で 2 群に分けて比較検討した。

IgA 陽性者(A 群)は 11 例,IgA 陰性者(B 群)は 7 例であった。